

中国語の発音教授について

その初歩段階における二三の手法

吉 村 尚 子

数年来、中国語を教えるにあたって、思いついたことを、手当たり次第にメモしておいた。いつのまにか相当量たまっているので、その中からいくつかをえらんで、整理してみることにした。

MEMO—I

この十数年来、さまざまな対象に、さまざまな場で中国語を教えてきた。その数、すでに 3,000 人を越えている。

日本および日本人にとって、中国語の学習と、それを通してのより深い中国認識は、好むと好まないとにかかわらず必要不可欠なもの、という断定の上にたって教えれば教えるほど、中国語の、第二あるいは選択外国語としての広範な普及は、さまざまな困難にみちている。

その第一は、いうまでもなく政治形態が全く相容れない国の語学になってしまっていること。

戦後四半世紀ちかく過ぎた今も、国交の回復すら、なお当分は望みうすという状態では、地理的に最も近い国でありながら、日常的には、全く没交渉の面が多くなりすぎてしまった。

たまたまニュースとしてはいつてくるものも、異常に拡大されていたり、ゆがめられていたり、一小部分のものであったりする。

結果、日常、意識的に強い関心をもって、正確に中国のあり方を把握しようと努力している者にさえ、全般に、また細部にわたって、実態を客観

的に観察することが、困難になってきている。大衆は、とくに最近の、目先の利益には全く敏感な一般青年層は、自己の日常や将来に、手っ取り早く利益をもたらさない外国のことなどには、全く冷淡で、したがって、その国語に対しても、意欲や興味はほとんど持たない。聞く機会も話す機会もないことなどには頓着しない。中国語をとったのは、ただ文字がおなじだから、フランス語やドイツ語などに比べて、多少でもおぼえるための労力が省けるだろうから——というのが大部分である。覚わろうとおぼわるまいと、単位さえとればよい——こういう大部分の学習者を相手にしていると、時には、子供に授業をしているような錯覚さえ起しそうになる。

第二に、中国に対する日本人一般の、従来からの因縁による、あらゆる点での中国認識や好悪感が、実に千差万別で、またその差が極度にはげしいことからくる困難性である。

四半世紀以前、日本人はあらゆる階層にわたって、中国大陆へ移住した時代があった。

更には、百万以上の軍隊が大陸に投入され、長い果しない行軍と戦いの幾春秋を経験した。

明治から大正へかけての、大陸浪人時代ともいうべき相当期間を序曲とする この庶民的には、一種のゴールドラッシュとでもいう時代。

都会の裏街の長屋の住人までが、日常的に満州のことを口にし、夜逃げの一家も巷のあふれものも、われもわれもと、大陸にあふれ出ていった。

当時、渡華したそれら日本人の生活は、それぞれ、その周辺の中国人と結びつき、切実な利害関係をもって、中国人と対決することになった。結果、よほど意識的に客観的に、中国を研究することに努めた者でないかぎり、日本人たちはすべて、各自の体験による自然発生的な、対中国人認識と好悪の感情をもつに至った。

そういう二百万以上の日本人が、敗戦後の中国からの総引揚によって、

また改めて経験させられた最後の中国人との接触の、極端な差異にしたがって、また、中国——中国人観や、愛憎の念を、更に深刻にして帰国し、それをそのまま、それぞれ郷里の日本人につたえた。

主として以上のような理由からくる日本人一般の、千差万別の対中国認識と感情は、国交回復によって是正されることもなく、四半世紀が過ぎた。

中国はその間に一大変革をとげた。がそれは、日本の大衆とは無縁のままに発展し、そのため、ある一部の知識人ですら、²⁾ 朝鮮と中国の区別さえつかないほど、中国のことは、なんとなく忘れていようとする気配が見えはじめている。

一方ある人々は、かつての自身の体験や認識の上に、実情がよくわからないままに、一層の恐怖や嫌悪感を積みかさね、中国とさえいえば、一概に退けたがる風潮も感じられる。

が また一部には、それらとは全く正反対に、はげしく意識的に、好感を示す少数の傾向も出てきている。

戦前の古い年代層にしてからが、すでにこのように複雑多岐なあり方をしめしている。

ところが更に廿幾年、前記のように戦前の日中交流風潮からは全く隔絶された世代が、今や大量に存在しはじめている。当然その一部は、各自の属する環境やグループから得た観念的な中国観や、未熟ではげしい対中国感情をもつ。

仔細に観察すると、そういう彼等はまた更に、中国に対して好意的であるのと、極端に敵対感をもつものなどに細分されている。

彼等は少数ではあるが、行動的な年代であるだけに、時には、中国語の授業の最中に、一見まるで無関係な——その実、^{9) 10)} ことばは社会から隔絶して存在するものではないから——現在の日中関係や、日本のあり方などをふまえた なまなましい問題が、突如として提起されることも、一再ではない。

中国語教育にあたるわたしたちは、昔ながらの同文同種ということばに

甘えたり、明治以来盛んだった儒教的教育による親愛感がぬけきらぬまま、たまたま漢詩などの趣味がこうじて会話も習ってみたいなどいうものの好きが現れたり、すぎてみれば何もかもが懐かしい人情の常で、満州時代への単純な郷愁から、もう一度中国語を学習してみたいなどという、気のよい庶民的な人々に出あうことがかさなったりすると、つい、教授対象のすべてを一様に、安易にみなしがちであるが、一旦、おもいを深くしてみると、自身の立場を那邊におくかは別問題としても、その教えようとする対象は実に千差万別。あらゆる思想上の、また、意識の上での、また個人的感情における、極端に激しい渦巻の上にある現代性そのものであり、授業の折り折りに書き溜められたメモの複雑多様性に、胸のいたむ想いも深い。

今回は、それら広義の意味の教授上の諸問題は暫くおき、純粹に、中国語の初歩段階における発音教授の上での、極く具体的な手法に関するメモの中から、幾つかをとり出して、整理しておきたいと思う。

MEMO—Ⅱ

さて中国語教授の対象としての現在の日本人、特にその数と日常行動からみて、大衆的青年層ともいべき多くの学習者たちは、かつて一語の實際の中国語をきいたこともなく、まして、自ら話す機会もない。そのうえ多くは特に強い目的意識をもって学習する意欲も持たない。

そういう点で、ことばを知る以前の幼児と全く共通の条件をもつということは、前にもちょっと触れた。

そこで、本来は今更改めていうまでもないことであろうが、やはり、効果的な教授上の手法を述べる上での必要上、教育全般を通じて、その土台となる最少限の基礎的条件をあげてみよう。

まず、学習者が **A** 自然に自発的な **B** 好奇心を起し **C** 学習意欲を燃やし **D** 注意力を集中し **E** 心に強烈に印象づける という当然のことが、

忠実に実践されるようにしむけることである。

これについてわたしはひとつ、貴重な体験を持っている。それは、昭和二十二年。日本敗戦後間もない時期。——戦争に伴なう非人道は 古今東西いづこも同じで、不安な暗い北京での蟄居生活中であった。

ある時、中国側から、突然、日本語を教えるようにと指名命令された。

対象者は二十才。中国奥地の西安地方から、終戦後出てきたばかり、日本人などみたこともなければ、まして日本語なんか耳にしたこともない青年将校に、早急に日本語をしゃべられるようにせよ——だった。

敗戦前、日本語学校をひらいて、中国の青少年に、数年間、日本語を教えた経験をもつわたしは、内心多少の自信もないではなかったが、一両日教えてみて、青くなった。

まるでおぼえる気がないのである。上長の命令と、隊務がサボれるからきているまでで、日本語に対して、興味も関心も意欲ももってはいない。

だから、いわば捕虜であるわたしが、懸命に教えようとすればするほど、彼は迷惑がる。成績があがらなくても、教える側の責任にする気であることが手にとるようにわかるのだ。

どこの抑留地でもがそうであったように、戦勝国側の意を迎えそこなった者には、生命の保証もない。この 大してあたまのよくない、悪党ではないが、懶けたいために精いっぱいずるくなっている田舎出の、根は単純で、慇懃無礼な坊やに、いったいどう教えこめばよいのか。

わたしは殆んど途方にくれ、三日間休んで考えぬいた。

翌日、例によって表面は何気なく、内心は鼻歌まじり、書斎にとおった彼は、机上に眼をおとすと、ハッとした。みるみる頬に血がのぼり、内心の動揺が手にとるようだ。何時もの高慢さは何処へやら、視線は 机上の日本語のアイウエオの五種の口型の紙片から離れようとしめない。わたしは心中、ホッと安吐の息をした。

実はわたくしは、窮乏の極にあったであろう中国奥地の田舎から、呼びよせられたばかりの若者である彼の A 無意識的な B 興味を惹き C 好奇

心から D 注意を集中し E いやでも強烈に印象づけさせる 方法として、次の手段を試みておいたのである。

まず前もってわたし自身の唇に濃厚に口紅をなすりつけ、鏡をみながら正確な ア の発音をし、その開いたままの唇に白紙を擦しつける。同様にして イ から オ まで、五個のわたしの口型を捺染しておいてあった。

五種の日本語の真紅の口型が——彼にとっては思いもかけない鮮烈なキスマークが——やにわに彼の眼を射たわけである。

MEMO—Ⅲ

およそ人にもものを教える場合、また当然 前述 A B C D E の五項目以前の、下準備がされていなくてはならない。

すなわち F 学習者の環境と経歴 G そこからくる性格 および H 常識と一般的能力と学力と、それらの総合結果としての I 彼の心的状態までを、ある程度 のみこんで、教えるに当っては 時々刻々 その心理の動きを機敏・的確にとらえ J 利用すること である。

当時、無理にひきうけさせられるにあたって、念のため、中国側から怪しまれるほど、彼の環境と経歴を根ほり葉ほり訊ねておいたからこそ、これは試みられた 窮余の一策でもあった。

さて、口紅を最も丁寧に厚く塗っておいてうつしとった臘脂の口形は、まさに唇の上の細い皮膚の線までが、われながら なまなましく描き出されていて、若い彼の視線は釘づけとなり、紅くなり青くなりして、咄嗟には声も出ない。

その最初の微妙な数秒を逃さず、わたしは、教師としての、特に厳粛な態度で、淳々と説明した。

この五つの日本語の母音の口型は、彼の上官でもあり父上でもある將軍

から厳命され その後直接懇願されたように、最も早く、且つ正確に、日本語の発音を、彼に把握させたいからこそ、とくに、わたし自身の最も正しいと思う日本語の母音の口型を、実際に、マークしたものであること。

今から タイプ用紙をその上に重ね、窓ガラスに透かして、その口型を正確にうつしとってもらいたいこと。

そうして写し上ったものは、なまの、最も典型的な 日本語の五母音の口型だから と。

なまなましい口紅と、厳粛な雰囲気におされた彼は、黙々として、はじめてみる真剣さで、丁寧にうつしとっていた。

その手指が、かすかにふるえているのを、いち早くみてとったわたしは、今こそ、若い異民族の心に、最も集中的に 強烈に、日本語の母音の口型が刻みこまれたことを深く知った。

彼が鉛筆でうつした口型を、更に **4B**で修正してやりながら、当日帰隊したら、鏡で見比べてはこの図型どおりの口の形をつくり、何度となく発音練習することを誓わせた。

その日、彼は実に素直にうなづいていた。

帰りぎわに、もしそれでも どうしても うまく発音できないように思えたら、その**4B**の口型の上に、自身の口をあてがってみては やりなおしさえすれば、きつとうまくできるでしょう とつけ加えることも、忘れなかった。彼の日本語は驚異的に進歩した。わたしはその後、父将軍から、当時の日本人としては驚くほどの歓待と便宜をうけることになった。

今にしておもえば、以上もまた、戦争による絶対絶命の境地がひねり出した 微妙にして風刺に富んだ方法でもあった。

一転して、中国語教授に際しても、前掲 **A~E** の五項目と同時に、同じく前掲 **F~J** を、常に、面倒をいとわず、誠実に準備しておくことが、教える者としての態度でなくてはならないと思う。

個人の場合は勿論 集団教育に当たっても、可能なかぎり 学生一人一人

の個人的事情を知悉すると同時に、教室全体の雰囲気までを、的確微妙に把握し、機に臨んでは、対象に最も即応したあらゆる学問上の理論・方法・一般常識、そして大道具から小道具まで利用できる一切のものは、それが有形であると無形たるとを問わず、間髪をいれず使いこなして、誠心誠意あたることが、授業の成果をより大きく、また迅速にする側面的な緊要事であろうと思う。

MEMO—Ⅳ

現在の日本人の中国語発音学習上の困難性—(1)

前にも述べたように、現在の中国は一般日本人の日常生活——特に精神面での——にとって、あまりにも無縁なただ噂にきくだけの遠い存在になっている。その結果町を歩いても、英語の歌曲は、朝夕わたしたちを囲繞し、フランス語・ドイツ語・ロシア語などもまた、絶えず耳に親しいのに、ただ中国現代語の発音だけが、チャチな中華料理のメニューの上で見る以外、きき馴れたくても、耳にはいることはほとんどない。

MEMO—Ⅴ

承前一同じく中国語学習上の困難性—(2)

一方、われわれ人間の耳は、ききなれたおんには敏感で、割合いに正確にききわけが、ききなれない発音や未知のことばに対しては、非常に不正確なききとり方しかできない。

その第一例

昭和四十年。飯田市郊外の農家の七才の男児は、何はなくとも桃屋の江戸むらさき というテレビのコマーシャルをきいて、なみゃあ なっただむ

ももやのえどうらっきい／ と、自身では 全くうまく口真似をした積りで、教える者もないまま、約半年間、見得をきっては はしゃいでいた。


第 二 例

大正十五年四月。県下第一と称された女学校、一年某組の英語の授業において、その教師は、現在も外人の会話教授によく行われているような、発音に対する説明は全然なく、教師の発言…生徒の口真似…の方式で、リーダーの授業をすすめた。

四十数年前の名古屋では、英語もまた、現在の中国語と全くおなじで、それまで全然英語に接したことのなかった生徒たちは、最後列の六人全部と、第二列目の両隅など約十名が **What is this?** を **ぽっていぢいす?** ととききちがえたまま、二ヶ月近く経過し、それぞれ、永く英語の成績に影響したことを記憶する。

第 三 例

わたしの父は、日露戦に軍医として、遼陽の周辺に相当期間駐屯したというが、幼なかったわたしに、中国語の 否 といういみは、**ぽこぺん** であると 常に語りきかせた。

実は父のきいた中国語は、本来は **不…プ**／**ッ** 日本語の**プ**と**ブ**の中間のような**おん**のあとに、唇を丸く、つぼめて、強く**ウ**の音をつづけ、しかもその高低の声の調子を 大体  の音階で発音する。

够…／**ッ** 日本語の**コ**とも**ゴ**ともとれる**おん**のあとに、前述**ウ**の**おん**をつづけ、しかもその音節の声の調子を、烏の**カ**の啼き声のような調子で発音する。**本…**／**ン** 同様に、日本語の**ペ**でも**ベ**でもない あいまいな中間音につづけて、舌尖を上顎につけるが その音節の調子を、がっかりした時の嘆息の声調で、一旦低くさげてから ゆっくり 力強くあがる調子でいう。こうして発音された

不够本 は すなわち**本銭** いいかえれば仕入値にも足りない——だから売ってあげられませんよ という意味であったことを、中国語を学習す

るようになってから発見し了解した。

その後、奉天方面へ旅行し、実際に遼陽附近の発音を聴いてみたが 不
够本 はやはり プノッ コヘッ ペン で、父のいうような ポコペン
では全くなく、父のききとり方 および発音は、完全にまちがいであった
ことを確めた。

以上三例は、人間の耳は、未知の または ききなれないことばに対して
は、ほとんどみな聴能訓練を必要とする難聴者または聾者の様相を呈する
という実例である。

MEMO—VI

承前—同じく中国語学習上の困難性—(3)

日本人の中国語学習の困難の第三は、日本人——ひいて日本語のもつム
ードが、中国のそれと あまりにもかけはなれていることからくるもので
あろう。

日本人は古来、わび さび を尊び、ほのかなるもの かそけく かよ
わく ひそやかなムードを漂よわすものを、こよなくいとおしみつづけて
きた。

祖先の選んだ蓬萊の小列島は、すでにして四季みどりにおおわれ、温
暖・湿潤な天然現象は 住む人々をあまやかし、黒潮になごむ四辺の海浜
は、外敵の脅威からさえ、まもりとおしてくれた。

かくて愛の歡喜の極地にして、なお囁きの表現をとり、歌謡・音曲 す
べて四帖半をその天地として、淡くしとやかな発達をとげた。

寒暑きびしく広大無辺の大地に、外敵との興亡を繰り返し ついに耐え
ぬいた中国人の、強勢の中国語とは似もつかぬその発音に、強さが欠如す
るのは、常識的にも当然であろう。

しかもわれわれ人間は、生理的にも、機能的にも その環境に適応して成長する。

先祖代々 日本語社会に住みつき、自身また幼時から現在まで、その個体形成を日本語社会で成しとげた者は、最低限度、多少とも発音器官が、かたちの上でも その働きの上でも、日本語的に発達成育している筈である。

このため、前出第三例の父の耳が、たとい当時、中国語の 不够本 の発音を、中国の おん そのままに正確にききとり得たとしても、さてそれをすぐ自身の発音器官のうごきにのせたとき、哀しいかなその発音はひとりでに、中国語的ではない ポコペン という純日本的なことばに変貌してしまっていたことであろう。

MEMO—Ⅶ

以上 MEMO—Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ に詳述したところによって、器用な者や特に耳の発達している者を除いては、一般学習者は、ただ普通に単純に、教師が発音してきかせ→学生自身の理解によってそれを模倣発音させ→その発音の欠点を教師が一寸指摘して、もう一度やりなおさせる→どうもよくならない。が、まあ我慢して次へ進む…という 従来からの普遍的な授業習慣などによるだけでは 確かに不備であると思われる。

ここに思い浮ぶのが、聾啞教育の理論及び技法の中から、応用できるものを適宜取捨選択して、活用することである。

ただし、聾啞教育は、普通は、全くの幼児に対して行われるものであり、殆んどは生活経験や能力をもたず、当然、常識・理解力・知能にも欠ける。

その上、その失聴・難聴などは、主として生理的欠陥に起因するものであるから、感覚訓練・読話訓練・聴能訓練などの基礎からはじめ、同時にそのほかの年齢に相応した、一般的な知能教育・情操教育なども 併せて

行われなければならない。それに比べて、

中国語学習者は、すでにほとんどが成人または成人に近く、また、聴覚や発音器官自体には普通 生理的欠陥はないのだから、幼児教育上の、または、純粋な聾啞者教育におけるような配慮や逡巡は無用であろう。

例えば、⁵⁾ 聾啞教育では、口型をあまりに重視して教えたり、強く噛んでふくめるように発音してみせると、模倣する子供の発音が、自然の調子からはずれるようになることを顧慮せねばならないが、中国語学習者は普通は常識のある正常な聴能の持主なので、ただ口型や発音器官の正しい動作訓練を徹底的に反覆し、筋肉が熟練するに至らせることさえ考えればよい。

筋肉が熟練する頃には、耳もまた、教師の正しい中国語をききなれるから自然に正確にききとって自己のを修正するように作用する。何時までも不自然に誇張された発音をしつづける恐れは、実験的にも、全くない。むしろ、幼時から習熟しきった日本語の発音に堕ちる危険性の方が多い。

中国語の初歩段階では、やはり やや行きすぎるほどに 厳しく、口型そのほかの訓練を課すべきであろう。

以上のように、周到にこまかに聾啞教育とも照合比較しつつ、その条件と結果、得失などを熟考の上、とりいれるべきは躊躇なく 採用実践することこそが、語学教育における前むきの姿勢であろう。

以下、それらの試みのいくつかを挙げよう。

MEMO—VIII

中国語の強勢

印象づけ 体得

一般の拼音による発音教授の初歩段階で、中国語が強勢であるという説

明は、普通かならずされるが、これもまた ともすればあたまで了解されるばかりで、実行されにくい。

だから **jiang** の発音が、おちゃんの **チャン** になってしまう。

そういうことをさけるためには、まず最初の時間にわざと、**くどい／と**
感じさせるまで、強勢であるという説明を強調反覆して**強く印象づける**ことが大切であると思われる。

その上で、特に強勢で発音するのに適した基本母音など、例えば **i・u・a** などの、とくに **i** の**おん**の訓練には、毎回の発音時に 発語に力をいれる刹那に、同時に 上体や首までを、実際に強く前におし出させ、徹底的に学習者の肉体にまで、文字どおり体得させ 習熟させる。

そうすれば、長年満州に住んで当然発音はきれいになれた筈の多数の日本人が、**頂好** を **テンホ** と発音したり、**先生** を **センション** と日本語的にいったり、**公共** が **コンコン** と 狐の擬声音になってしまったりしたのと同じ危険性を 割合に容易に防ぐことができるのである。

MEMO—IX

基本母音 a

共通点 納得 印象づけ

説明に当って贅言は不要。学習者が子供でさえなければ、ただ 日本語の **ア** より一段と大きく口をあけ、力強く大声で **a** と発音せよ——とだけでよい。

実は、ここが聾・幼児教育との相異点である。

幼児は常識の程度をこえて、むやみにりきむし、聾者は、自身の発音も教師のことばもききとることができない ので、一途に教わった姿勢や発語に力点をおく。そのため両者ともに、舌の位置が不適當に下がり、苦し

くきたない発音になる。中国語学習者は 学習意欲さえ もつものなら、常識と聴能で、自然に 或いは少しの助言で、その弊をさけられるものである。

次に日本語の ア 中国語の a の発音の共通点と差異を印象づける。

口の形や動きは全く同じ (共通点) で、口のひらきだけが、中国語の a は一段と大きい (相異点) を説明し、ア→a と、口型の大小のちがいを はっきり実演してみせ、その上で、日本語の ア につづいて中国語の a を連続十回、更にそれを三度以上 (都合三十回) 繰り返させる。

学生たちは口を、小さく大きく…小さく大きく…と、生まれてはじめての口辺と上半身のリズム運動で、はじめははしゃいでいるが、ついに息切れがするまで連続させられ、ヘトヘトになる。

こんな手順にすれば前述の A 無意識に C 学習者の興味と意欲を喚起し E 強烈に印象づけさせる——など五項目は苦もなく実行されてしまう。

この印象づけは、例えば 数ヶ月後、好…hao の発音がきたない場合、この時の教室の情景を想起させるひと言によって、容易に矯正できる。その実例は枚挙に暇がないほどである。

基 本 母 音 u

印象づけ 反覆 体得

やはり、発音器官・耳・肉体など自体に、日本語の ウ との相異を まずはっきり了解させる。発音器官の中国語的な うごき を 体得 印象づけさせる手順…など、すべて a とおなじ筆法でゆく。

前もって、中国音は強勢であることを、繰返し耳に注入することも同前。

まず各自に口笛を吹かせる。さてその口笛の音のでるときの 唇と口の周辺の状態に焦点をあわせて、各自に考えさせる。するとみな、

唇が 強く 突き出して つぼまっていることに気づく。その口のままで う といわせる。日本語の う 音 とのちがいを、はじめて感覚的に彼等の頭脳と体が了解する。そこで、

更に印象づける為に、在華当時、何心なく日本語的な う 音 を発したら、隣の部屋にいたわたしの中国語の恩師 張さんが、間髪をいれず、大声でとがめた実例をきかせると、学生たちは眼をみはって、北京人の音感の鋭さにおどろく。その上で、

更に全員を瞑目させ、口笛の口型で力強く u 音 を発音してきかせ、つづいて、日本語の う を発声し、そのまま、両三回比べてきかせると一様に頷つき、はじめて、おん の微妙さに目が覚めたような表情をみせる。鈍感な者にも手っ取り早く印象づけられることは驚くほどである。

基 本 母 音 o

理解 体得 条件反射

唇を 強く つぼめて 突き出す ことは u と共通。

その大きさだけが、u が鉛筆の蕊大とすれば、o は自分の小指大になると、説明すれば、学習者たちは、その頃にはすでにもう、自発的に小指をつっこんでみては、o の発音の反覆練習をしはじめている。前からの行動訓練による条件反射の利用が自然に出来てしまうわけである。

力をいれてッ／ と更に一言いい添えれば 全くきれいな発音をする。

これらもまた、突出した口の開きなどは適当にくずれてゆき、いつまでも見っともなく唇をつきだしている者など現在まで皆無である。

基 本 母 音 i

指 納得 印象づけ

普通の日本人には、中国音の i は、自身にはそれとは知らず苦手であ

る。

日本の *イ* が非常に弱勢で、やわらかに発音する習慣からくるのである。

特に前に子音 *j・q・x* がつくとき、例えば *xiang* は *シャン* *jiang* は *ジャン* となって、実にききぐるしい。

だから *i* の強勢と弱勢との例として、李香蘭の歌う夜来香の *xiang* と、他の中国語を知らない歌手の *イ・エ・ラ・イ・シ・ャ・ン* の *シャン* を、メロディを、ほんのちょっとつけて比べてきかせると、とたんに、他の中国音に対しては、極度に鈍感な初心者にも、その発音の美醜の差が、抵抗なしに *ハ・ハ・ン* と、うなづけるから妙である。

その納得の機に乗じて、純粹で美しい中国語の発音をひきだすために、利用できるものは何でも使おう と訴え、学習者の同意を得ておく。そして、

まず 左手をださせる。人指し指と中指で *V* 字をつくらせる。好奇心いっぱい 突き出した *V* 字の両指先を、自身の唇の左右の端に、力をいれておしあててゆかせる。当然、口は横一文字に大きくひらく。

もう少し歯をむきだしてッ！ 上半身の力でもってッ！ さあこのとおりに—— *i* ——と範を示す。

猿が *イーッ* と歯をむきだした御面相で発声なされば、それが理想的な *i* なので——などといい添えれば、満場笑いの渦である。

将来、発音がくずれて矯正したい場合、猿の顔 とさえいえば この場のことをすべて思い出して 美しい発音に戻ってくれる。

これも、中国人と会話ができるほどになってまで、そんな百面相を敢えてする豪の者は、まだ現われないから、当分の間、わたしは少々ゆきすぎともいえるこの方法によって、飽くまで初期の 激しい反覆練習を重ねさせることにしたい。

MEMO—X

舌先前子音 Z・C・S

鏡

前項、MEMO V・VI などで詳述したようなことから、初心者は、自身では、教わったとおりに、唇やその他の発音器官を動かしているつもりでも、日本語的に成長し、日本語になれきった わが筋肉どもは、おいそれとは働いてくれない。

例えば 子音 Z・C・S の発音において、教師のいうとおり、唇を上下左右にひらいて、上下の歯が相手からまる見えになるほど、懸命に頑張っているつもりでも、実は眼ばかり見開いていたりする。忠告すると、納得できず、ふくれ面をされるほどである。

そんなとき、ちょっと鏡をみせると、とたんに吹き出して、即座に気持よく訂正してくれる。

自分の眼でモニターさせられる手鏡は、発音教育にはなくてはならない必需品で、機に応じて巧みに利用する 直接間接の利益ははかり知れないものがあると思ふ。

MEMO—XI

無気音 有気音

赤いハネ 白い紙片

年末がくると売り出される赤いハネの廃物は、学習者に自身の発音が正しく無気音であることを確認させるうえで、実に恰好な小道具である。

二百人にきこえるほどの大声で、その毛先も発音の為に動かしてはだめですよ、さあ、どんどん やってごらん下さい。

前もって発音の仕方を納得させ、一応練習させたりうえて、こうして仕上げをすれば、無気音はもう完全である。発音する。首を傾げる。うまくゆかなかっただけ。何くそッという顔つきでもう一度やってみている。てんでに赤いハネを手にして実に一生懸命である。……

有気音の訓練は、手近なノートの一頁を両手でもたせておいて、三度ためれば三度とも その紙が吹き折れまがることを目標に、反覆練習させる。

次回には、各自そのための小さな紙片を持参させる。

持参した白い紙片と赤い羽毛の波。それが夜の教室だったりすれば、学習の場は とみに華やいで、かわるがわる吹きとばしてみても われながらうまくいったと 悦にいたり、まだ吹きとばせない！ と 頭をかいいたり、現代の、思索的学習によわい学生たちも ここではすこぶるごきげんで、にこやかに孜孜として、練習にはげんでくれる。

教える側にとっても、楽しい教室風景のいっときである。

- 1) 流感・高熱・肺炎とつづき、意外にながびいたため、資料についていま一度たしかめることができなくなり、考えていたものを急遽とりやめて不本意ながら、研究会の発表にと思っていたこれをあてた。
- 2) ある中国語講習会で、その立派な主催者側の代表が講師を紹介して曰く；先生は永く朝鮮に在住されましたので、中国語は誠に御堪能…云々の実例をさす。
- 3) 発音指導に聾啞教育技法をとりいれてみることは、昔からの夢だったので、その実際を参観したことなどはあまりに古く年月も忘れた。最近再び希望しているが、まだ実現しない。

この稿のうち、その方面に関しては、聾啞学校校長であられた関島芳馨先生や桜木西山先生がたに負うところが少なくない。いろいろ御意見をうかがい御助言を賜ったこと、この場をかりて深く感謝申し上げる。

- 4) 特に参考文献は、その方面のものはみな、関島先生が自身期限切迫の報告書執筆で、御多忙中にもかかわらず、時間をかけてえらんで下さり、お借しいただいたものばかりである。

よい参考になり、至るところに、さまざまな共感や示唆をふくんでいるし、中には、どの箇所と指摘し得ないが、通読再読して自信を深めるうえで大きな力になったものもあり、心から有難く、一応書名をあげておく。

- 5) 久保山トモ外 5 名：聾教育のためのテキスト，昭和41年，日本特殊教育協会；
p. 35.
- 6) 大西雅雄・住宏平外 4 名：言語理論，昭和39年，同上。
- 7) 松沢豪：ろう児のことばの指導，昭和38年，耳とことばの不自由な子の親の会。
- 8) 松本金寿・住宏平：聴覚欠陥児，1966年，明治図書出版。
- 9) S・I・ハヤカワ：大久保忠利訳：思考と行動における言語，1966年，岩波書店，
p. 67.
- 10) ソ連科学院哲学研究所：森・寺沢訳：哲学教程，第一分冊，1963年，p. 292～
293，p. 277.
- 11) 以上は，LL教室など新しく出て来るよい方法を，否定するものでは毛頭ない。
立派な設備などが使用出来る場合は，積極的に使用したいものである。

ただそれ以前の問題として，或いは，そういう設備を利用出来ない場合にも，教授者が真剣に学習者のためにと心をつくせば，案外手近なところにも，愉快に 効率的に 学習させる道は，いくらでも見つけられそうだ という小さな主張であり，その上，これらの手順や方法を行ってみると，いわゆる語学によわい学生までが，不思議に非常な親しみをみせ，盛りあがりが出て来ているので，心交流 話し合いの場が自然に生れるのを体験し痛感しているので，時節柄，何かの参考にもなればと，貧しいものを敢えて発表した。

御叱正と御教導を頂ければ幸である。